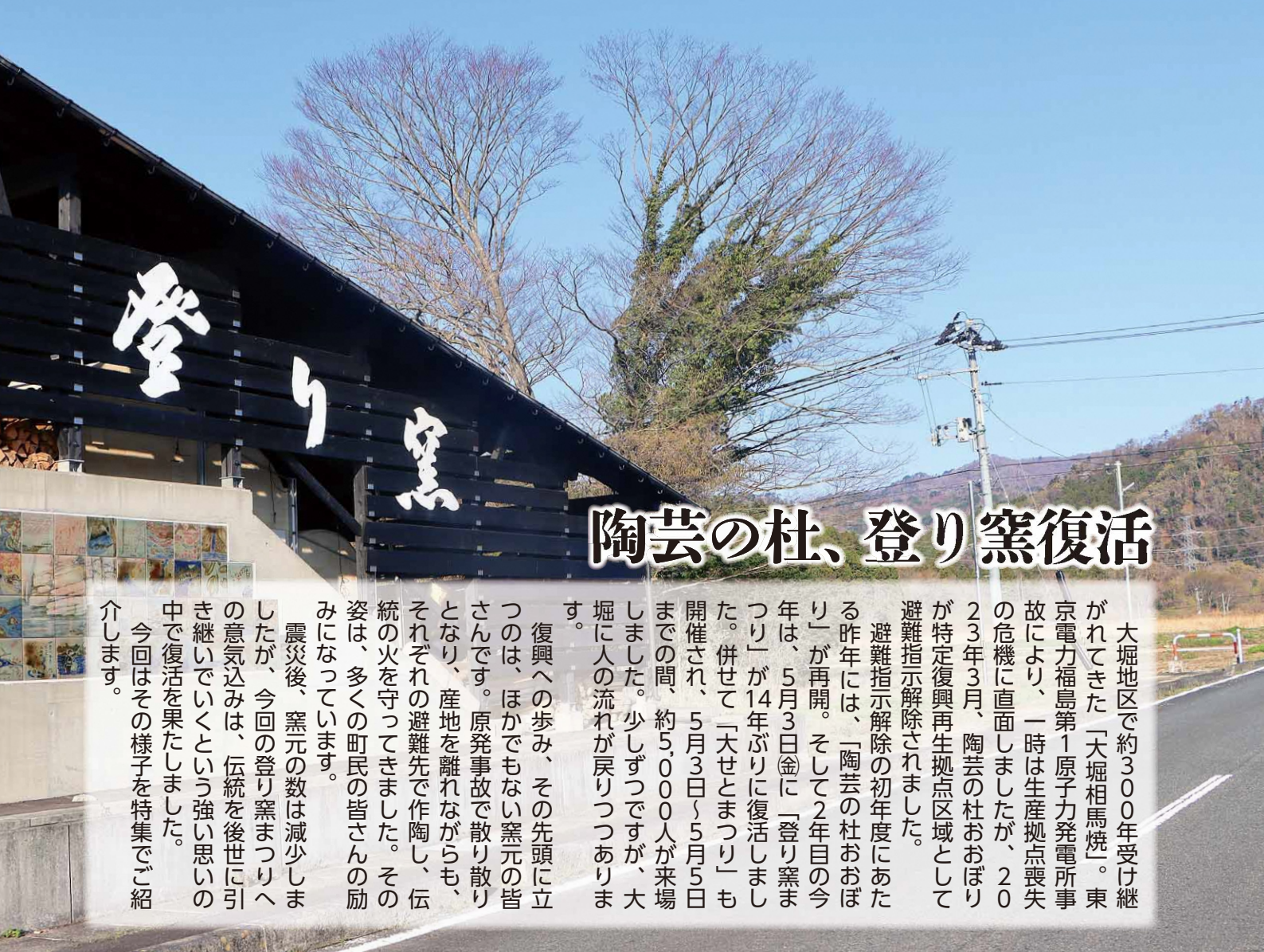




4月11日、登り窯への火入れ。炎が創り出す美。
＝大堀相馬焼協同組合 提供



陶芸の杜、登り窯復活

大堀地区で約300年受け継がれてきた「大堀相馬焼」。東京電力福島第1原子力発電所事故により、一時は生産拠点喪失の危機に直面しましたが、2023年3月、陶芸の杜おおぼりが特定復興再生拠点区域として避難指示解除されました。

避難指示解除の初年度にあたる昨年には、「陶芸の杜おおぼり」が再開。そして2年目の今年は、5月3日(金)に「登り窯まつり」が14年ぶりに復活しました。併せて「大せとまつり」も開催され、5月3日～5月5日までの間、約5,000人が来場しました。少しずつですが、大堀に人の流れが戻りつつあります。

復興への歩み、その先頭に立つのは、ほかでもない窯元の皆さんです。原発事故で散り散りとなり、産地を離れながらも、それぞれの避難先で作陶し、伝統の火を守ってきました。その姿は、多くの町民の皆さんの励みになっています。

震災後、窯元の数は減少しましたが、今回の登り窯まつりへの意気込みは、伝統を後世に引き継いでいくという強い思いの中で復活を果たしました。今回はその様子を特集でご紹介します。

大せとまつりの会場に並ぶ焼き物



大せとまつりで展示販売された作品の一部



登り窯まつりで展示した子どもたちの作品

3日3晩の焼成

4月11日(木)、陶芸の杜おおぼりで、登り窯での本焼きが東日本大震災と原発事故以来、初めて行われました。主催したのは大堀相馬焼協同組合の7窯元の皆さんです。避難先から大堀に駆けつけ、3日3晩、夜通しで薪をくべ続け、作品を完成させました。



昨年復旧した登り窯



窯の中は1,200度を超す高温に

壊れた窯を復旧

登り窯は、最下部が焚き口で、下の窯から火が登っていきます。大堀相馬焼の登り窯は約300年以上前の江戸時代に始まりました。やがて相馬藩が保護して特産品となり、1978年に国の伝統的工芸品に指定されました。

震災と原発事故により、登り窯は壊れてしまいました。が、昨年3月の避難指示解除と同時に復旧しました。耐火レンガ構造で、アカマツの薪が燃料です。

今回はなみえ創成小の児童や住民の皆さんの作品など約800点



火入れ2日目の夜、窯場にて

を焼き上げます。

火入れ2日目の夜。窯の内部は最高1,270度に達しました。真っ赤な火柱が煙突からあふれるほどに勢いを増します。窯元やボランティアの皆さんが汗を流しながら、薪を運んだり、交代して火の番をしていました。辺り一帯に闇が広がる中、ただそこだけが不夜城のように燃えていました。

苦勞の甲斐あった

そして迎えた窯出しの日。5月3日(金)、組合理事長の半谷貞辰さんが、作品一つ一つを丁寧に窯から出し、焼き上がりを確認しました。「初窯で不安と期待があったけれど、蓋を開けてみれば、予想より良い焼き上がり。苦勞した甲斐があった。組合のみんなで、避難先から通いながら準備してきたから。」

半谷さんは感慨深げに、手にとった焼き物を見つめました。会場には、大堀地区から福島市に避難しているという武田善衛さんの姿もありました。震災前の大堀での暮らしについて、語ってくださいました。

「冬は登り窯に行つて暖をとっていたよ。職人さんの中には走り駒を専門に描く人がいてね。すごく上手だった。近くの川で泳いだり、釣りをしたり。大堀は最高の場所だった。」と、故郷の景色を心から懐かしんでいました。

半谷さんは、今回の登り窯まつり・大せとまつりについて、こう振り返ります。

「大堀の自分の家にはまだ泊まることができず、車中泊しながら窯焼きにあたった。ガス窯ならメーターを調整し温度を管理できるが、薪は休むことができず難しい。登り窯ならではの過酷な肉体作業だった。ボランティアの皆さんも大変だったと思う。でも、皆で助け合い、組合にとっても良い経験になった。」

大堀の再生に向けて、これからも窯元の皆さんの奮闘が続きます。



窯出しする半谷貞辰さん



大せとまつり出店会場